

令和8年（2026年）9月1日発行

第8号 熊本市後藤是山記念館だより

たん せい 居

令和8年 令和9年
9月5日～2月28日



南画家小室翠雲の描いた「たんぽぽ」が表紙となった『かはがらし』創刊号。(昭和2年4月1日発行)



『東火』第533号(昭和56年1月31日発行)。この号が最終号となった。(是山、94歳)

後藤是山生誕140年・没後40年記念企画展
俳誌『かはがらし』と
『東火』で辿る是山

《記念企画展特集号》

〈企画展解説講話のご案内〉

第1回：令和8年10月31日(土)午後1時30分～3時

内容・『かはがらし』で辿る是山（戦前編）

第2回：令和8年11月28日(土)午後1時30分～3時

内容・『東火』で辿る是山（戦後編）

解説者：後藤是山記念館長 植木英貴

場 所：後藤是山記念館展示室

※当日は駐車場がないため公共交通機関をご利用ください。

会場 後藤是山記念館

熊本市中央区水前寺2丁目6-10

・開館日時：9:30～16:30

休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始（12/29～1/3）

入館料：大人200円 こども100円

（市内65歳の方及び市内小中学生は無料）

俳誌『かはがらし』と『東火』で辿る

後藤是山の半生(その2)

「戦前」と「戦後」を見る

後藤是山が末次青雉らと共に昭和2年4月に創刊した俳誌『かはがらし』は、昭和19年に『東火』と改称されます。その後昭和56年1月(是山94歳)まで、通算533号が発行されました。この『かはがらし』や『東火』には是山のその時々 の出来事や考えが書き残されています。

そこで今号は前号につづき、『かはがらし』や『東火』をもとに「戦前編」「戦後編」に分け、是山の活躍を振り返ってみたいと思います。

戦前編

1 『かはがらし』

昭和3年6月号より

夏目漱石夫人・鏡子氏と

娘婿・松岡譲氏の来熊

昭和3年6月号の『かはがらし』

(第2巻第6号)の「消息」欄に、このような是山へのお礼状が掲載されています。

「松岡譲氏(別府にて) いろいろご厄介になりました。お陰で予期以上の收穫があつて喜んでいます。昨日は案じた程のこともなく夕頃ここに着きました。博覧会で花火などが上がつたりして賑やかです。明日四国へ渡ります。釘山氏始め末次氏によりしくお伝えください。」といったものでした。

これは、昭和3年(1928年)5月13日から16日まで、漱石13回忌となるこの年、夏目漱石夫人の夏目鏡子氏が28年ぶりに、松岡譲氏(漱石の娘・筆子の夫。小説家)とともに来熊し、その帰り松岡氏が別府に着いて是山に出したお礼状です。

松岡氏はこの頃、鏡子夫人が漱石との思い出について語ったこと

を『漱石の思い出』という追憶記にまとめ、雑誌『改造』に連載していました。今回の来熊はそれを単行本として出版することとなり、その追補調査のための来熊でした。松岡氏はこの来熊に先立ち、是山へ、熊本で気軽に頼める案内役と写真屋さんを紹介してほしいと依頼してきました。是山は自ら案内することにし、写真撮影は九州日日新聞写真部の釘本豊氏が受け持つことになりました。

一行はまず14日に漱石の『草枕』の舞台となった小天の那古井温泉(湯の浦温泉)を訪ね、志保田家(前田家別邸)を訪ねました。この日は『かはがらし』の俳人・



『草枕』の舞台として有名になった小天の『漱石館』前での記念写真(昭和3年5月14日)。前列椅子に座っているのが鏡子夫人。その左が松岡譲氏。是山は鏡子夫人の後ろ。

末次青雉も同行し、大阪から熊本に来ていた俳人・青木月斗(正岡子規の弟子)、漱石の五高での教え子の行徳二郎氏も同行しています。翌15日には熊本市内の漱石が暮らした6軒の旧居を回り、教鞭を執った第五高等学校なども訪問しました。そして16日に熊本を立ち、別府を経て四国の松山へと向かいました。冒頭に紹介したお礼状はこのような経緯の中で松岡譲氏が出したものでした。

2 『かはがらし』昭和6年11月号と『東火』昭和35年12月号より
与謝野寛・晶子夫妻の来熊

昭和6年11月号の『かはがらし』(第5巻第11号)の「消息」に「与謝野先生と船を同じうして大阪に参候」とあります。

この時の経緯はこうです。是山はかねてからの交流の中で与謝野寛・晶子夫妻を久住に案内したいと考えていましたが、その機会がようやく訪れます。与謝野夫妻は昭和6年(1931年)10月1日、亀の井ホテル創業20周年祝賀会に招待され別府を訪れました。その翌日、是山は夫妻を久住へ案内するため竹田町(当時)で待ち

合わせます。そして久住に向かいますが、是山によるとその日は、久住は雲が深く、山の全貌は仰ぐことはできなかったが、斜陽を浴びて遠く阿蘇に連なる裾野の大観には接するを得た、と言っています。あいに翌日も雨になりましたが、夫妻らは久住町の旅館、安井屋に2泊しました。その後大分、別府、湯布院とまわりますが、是山もそれに同行し歌の旅をつづけました。是山は8日にはいったん熊本に戻ったものの、10日の夜に再び別府に来て、与謝野夫妻が帰京する同じ汽船に乗ります。

船室では夫妻と卓を囲んで歌をつくりながら神戸まで行きました。最初に紹介した「与謝野先生と船を同じうして大阪に参候」というのは、この時のことを是山が書いたものでした。

与謝野夫妻は翌7年（1932年）にも、8月1日から15日まで九州を訪れます。この時、与謝野夫妻は末娘、藤子を伴っての旅でした。この時も8月2日から久住を訪れ、湯之原温泉に泊まります。しかしこの時もあいにく雨でした。その後由布院に6日まで滞在し、国文学講習会のため別

府へ戻ります。そして11日の午後、阿蘇に向かい、その後人吉へ、そして三角から船に乗り天草へと周遊しています。

昭和35年12月号の『東火』(第34巻第12号)に掲載の「天草の嶋山」には、与謝野夫妻と天草へ行った時の思い出が書かれており、「与謝野先生夫妻の東道として天草に遊んだのは、昭和7年8月13日であった。その日波や高く晶子夫人は少し船酔ひされた」とあります。

この昭和7年の夫妻の九州旅



与謝野寛、晶子夫妻らとともに（久住登山口にて）。左から是山、晶子、寛。中央は是山の父・萬太郎。右から2人が工藤元平（久泉）。（昭和6年10月）

行にはおもしろい書簡が残っています。寛が是山に九州旅行の日程を知らせたものでしたが、それには「旅費その他に困りおり候ゆゑ、御国にて揮毫の依頼者あらば、新聞社または大兄個人にて御取まとめ下され候こと相叶はず候や」と相談しています。これも是山と寛との親しさが伝わってくる書簡です。

昭和6年、7年ともに与謝野夫妻は竹田、久住を訪れた際、多くの歌を詠んでいます。この時の夫妻の歌は、是山らの歌とともに、同行した工藤元平（歌人・後に久住町長となり久住の父と呼ばれる。号を久泉）によって昭和8年に『久住山の歌』にまとめられ出版されています。この本に収められた是山の歌のうち5首が川端康成の小説『波千鳥』の中で、寛、晶子の歌とともに登場します。

3 『かはがらし』

昭和9年10月号より

是山の九日退社と

月刊新聞『東火』の創刊

是山は昭和9年（1934年）7月24日に、明治42年（19

09年）、23歳の時に入社以来25年間勤めた九州日日新聞社（以下「九日」という。）を退社します。九日の元社長で当時顧問をし、是山の理解者であった山田珠一が亡くなったことから、日ごろから政党機関紙としての新聞の在り方に批判的だった是山が退社に追い込まれます。山田珠一が亡くなつて3か月後のことでした。

是山が突然辞めたことを知った九日の若い記者達は、是山の復社を九日に求め、20数名の名前を書いた連判状まで作りますが、結局是山の気持ちは変わりませんでした。

退社後、是山は今後の身の処し方を相談すべく、すぐに上京し、清浦奎吾、徳富蘇峰、安達謙蔵などと会います。そして是山は熊本で活動することを決心します。是山は48歳でした。

一方『かはがらし』の句友達は是山が熊本に残ることを聞いて喜びます。句友の一人、佐世保の犬塚春逕氏はこの喜びを手紙で送っています。それには、

「是山翁熊本の地を去られず著述とか『かはがらし』に専念してくださること全く嬉しいことです。（略）」

月刊新聞『東火』第1号（昭和9年11月3日発行）。
題号の『東火』は蘇峰が命名したもの。



翁の人格を尊敬してゐられる人の多いことが何よりうれしいことです。今後愈々山翁に御指導専一なる様ひたすらお願いする次第です。」と書かれています。

是山らが『かはがらし』を創刊して8年。是山が『かはがらし』の確固たる指導者となっていたことがわかります。

また是山は、清浦奎吾、徳富蘇峰の勧めもあり、「生涯一記者」としての志を貫くため月刊新聞『東火』の発行をはじめます。題号の『東火』（俳誌『東火』ではない。）は蘇峰が命名したのもでした。

月刊新聞『東火』の第1号に書かれた「編集手帖」欄には、是山

が『東火』の命名のいわれについて「肥後は東の火国にして阿蘇は東方に屹立する火の山也」と語り、『東火』は微々たる言論機関に過ぎずといへども、東の火国に生まれ出で、火の山阿蘇とともに燃え、阿蘇とともに叫ばんとす」と発行の意気込み

を書いていきます。また「言論機関は多いが商買本位に非ざれば政党本位のみ」であるとして、そのことが「今日我国の言論機関は、益々その本質より遠ざかり去らんとす」と訴えています。

月刊新聞『東火』は昭和13年まで発行され、その後は敬神党（神風連）の遺族及び同志の機関紙『櫻山』へと改題されました。

4 『かはがらし』

昭和19年3月号より

俳誌『かはがらし』と

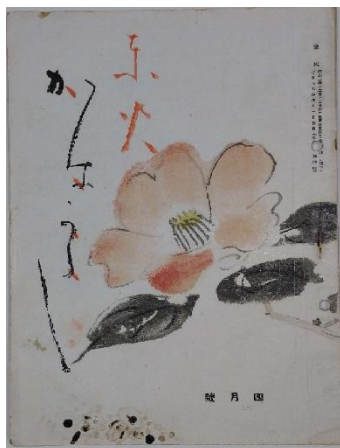
『阿蘇』との統合で『東火』へ

昭和17年（1942年）に入ると戦時下の中、言論統制や物資節

約が進められ、新聞も一県に一紙となり、是山がいた九州日日新聞社も、九州新聞社と合併し、「熊本日日新聞社」となりました。俳誌などの文芸誌においても同様で、『かはがらし』は昭和19年4月号から俳誌『阿蘇』と統合することとなります。

俳誌『阿蘇』は『かはがらし』創刊から2年後の昭和4年に、俳人・宮崎草餅（そうへい）らによって熊本市で創刊されたもので、誌名『阿蘇』は高濱虚子が命名したものでした。俳誌『阿蘇』は終戦後、昭和21年には復刊し、現在も活発に続いています。

『かはがらし』昭和19年3月号（第18巻第3号）には、「戦時下に於ける雑誌整備の主旨に副ひ本紙は『阿蘇』と統合の上4月号よ



『東火』第1号となる昭和19年4月号。表紙はそれまで印刷して残っていた『かはがらし』の表紙が使われている。そして『かはがらし』の文字を消して、『東火』と朱書きされている。

り『東火』と改題致候間此段謹告仕候」と、かはがらし社の社告が掲載されています。そして『東火』と改題した1号が昭和19年4号として発行されますが、当時の紙不足と物資節約を反映して、表紙は『かはがらし』の表紙を使ったまま、それに『東火』と上書されています。

この号の「編集後記」にはそのことに触れ、「表紙は『かはがらし』として既に印刷済のものがなお残って居るので、6月号までそれを利用して居ることにした。従って新題名の印刷など多少不体裁になった点もあるが、切に諒恕（りようじよ）を請う」と書かれています。

戦時下の文芸雑誌統合は全国的に進められますが、昭和19年9月号には「大阪以西における俳句雑誌は殆ど総て廃刊となり、本誌は関西における唯一の存在になった」とあり、当時の雑誌存続に向けた是山らの相当な努力が伺えます。それでも『東火』は毎月の発行は難しく、この年の11月、12月の合併号まで発行した後は、一年後の昭和20年、戦争が終わってからの11月、12月の合併号の発行になりました。

戦後編

5『東火』昭和21年7月号より 戦後の『東火』の発行と

新聞『西海時論』創刊

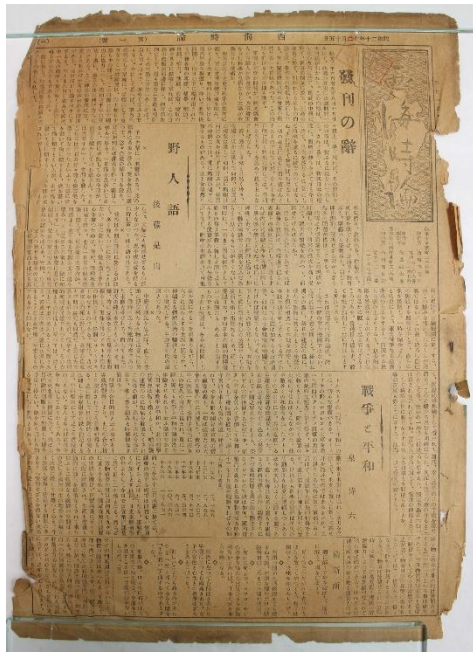
戦後の混乱の中、一旦は昭和20年(1945年)の11月、12月の合併号が発行されますが、その後は半年以上たった昭和21年の7月号の発行になりました。

是山はこの頃の苦労をこの7月号の「編集後記」で「昨年の11月、12月合併号を出して以来、将に半年を垂れんとして居る。印刷は依然として不如意であり、紙の入手は困難あるが、今後は幸いに順調に

刊行し得ると思つて居る」と語っています。

紺色の紙がようやく調達できたのでしよう。その紙をそのまま表紙にし黒インクで「東火 七月號」とだけ印刷されていますが、この号の表紙の見返しには「武滅び文興る」という是山の論説が掲載されています。

この論説は、日本が武(戦争)に負けたことを「能く泳ぐものは能く溺る」という言葉に例え、「文もその将に興らんとする時に心を用ゐて、健全なる歩みを以て進まなければ、溺没の運命をたどることになるであらう」と、敗戦を踏まえ健全な文化の発展と自重を促しています。



新聞『西海時論』第1号(昭和20年12月15日発行)。
この号の「発刊の辞」では、時代の大きな転換に際し、
是山の厳しい覚悟が語られている。

また是山はこれより前、昭和20年12月15日に新聞『西海時論』(当初、月2回発行。後に旬刊紙となる。)を創刊しています。

この第1号の「発刊の辞」では「暗黒なりし一切の過去」に十分な反省をもとめながらも、日本の苦

しい現状を鰥鰥(てつぷ)に例え、「我等はまず窮(きんきゆう)行(ぎ)き詰つたという意(い)せるこの現状を開(ひら)きつつ、将来の灯火(てい)を高く掲(か)げ、覆(ふ)轍(てつ)ふくつて。過去の失敗(しがい)の意(い)を戒(か)めつゝ、前進(ぜんしん)せなければならぬ」。

そのため「魯鈍(ろどん)自ら揣(さ)はか(ら)ず(自分の愚(ぐ)かさ(を)考えずの意(い)、敢(あ)えて本紙(ほんし)を創刊(そうかん)して世(よ)に問(と)はんとする所以(ゆゑ)である」と戦後(せんご)日本(にっぽん)の復興(ふくしゅう)に懸(か)けた思(おも)ひと発行(はつこう)への決意(けつぎ)を語(か)っています。

6『東火』昭和23年4月号より

是山の俳句指導

是山は俳誌の主宰として、『かはがらし』時代から俳句指導にあたっていました(P6トピック参照)。

また俳誌の紙面を割ってたびたび自らの俳論も展開しています。

その中から、これは是山が61歳の時ですが、昭和23年4月号の『東火』に「理論と作品」と題し掲載しています。

それには「真に風景詩を味ふにはその詩の成つた時、作者の在つた位置に、自らを置いて見なければならぬといふが、それは単(ひと)り風景詩のみではない。青春の詩を味ふには青春の心を要し、壮時の詩

を味ふには壮時の心を要し、老來の詩を味ふには老來の心を要する」と述べ、人と芸術は不可分なもので、理論だけでは到底、到達できないことを教えています。

そして、俳壇にも明治以降、俄に新興の機運が入つて来ましたが、「その作品を一瞥すると、理論と作品と、未だ必しも正比例してゐない感を深くする。理論は既に鮮明であるが、作品は猶ほ混沌としている」と述べ、ここでも理論だけでは到達できないことを語っています。

そして昭和24年6月号では、「本誌の誌友は何処までも自由な気持ちで、作句に精進していただきたい。勿論自由はわがままではない、不勉強ではない。(中略)真剣な心の底から生まれ出づるものを、流行の作句の型などに囚はれず、自己の創意によつて育てあげてゆくことは望ましい」と指導しています。

この考え方は是山らの俳句に対する理念でもあり、『かはがらし』の創刊時から貫かれてきた精神につながります。

7『東火』昭和26年12月号より

熊本県近代文化功労者となる

是山は、昭和26年(1951年)

度第4回熊本県近代文化功労者として顕彰されます。この制度は熊本県教育委員会が昭和23年度から設けた制度で、熊本県教育、学術、芸術などの分野から近代文化の発展に大きく貢献した者を顕彰する制度です。第1回は横井小楠、北里柴三郎らが選ばれています。

昭和26年度の第4回では、是山は、佐々友房、犬童球溪、高群逸枝らとともに顕彰されています。是山が65歳の時でした。

是山に対する顕彰は、閑文字と言われた新聞の文芸欄の拡充をはじめ、郷土史研究、歌人、俳人としての活動、月刊新聞などの発行など、活動が幅広く熊本近代文化の発展に大きく寄与した功績が認められるものです。

同年11月3日に顕彰式が行わ



『東火』昭和26年12月号に掲載された本多敏夫氏が書いた「是山先生文化功勞顕彰祝賀句会記」。

れ、11月11日に県市民合同の祝賀会が社会文化会館で行われました。この時は高橋守雄、辛島知己、福田虎亀、石坂繁らの歴代市長をはじめ、財界、文化界などから約200名の参加があり、盛大に開催されています。

そして祝賀会後にはこの祝賀会に参加した句友がそのまま淡成居に押し寄せ、自然と句会になったそうです。しかし是山はもうすでにこの時、相当お酒を飲んでいたようで、「先生は諸友句を案ずる傍ら酔山人(すいせん)に」を發揮して華しよの国に遊び給ひ、遂に一句も投げられなかった」とその時の様子を語っています。

さらに11月23日には『東火』の句友だけで「是山先生文化功勞顕彰祝賀句会」が開催され、この祝賀句会の様子を、句友の本多敏夫氏が昭和26年12月号の『東火』に詳しく述べています。その日はあいにく朝から雨が降り続いたよう、で、「淡成居の銀杏の錦も、蘇峰先生の詩碑も、昨年建った落葉句碑(筆塚のこと)も夜雨(やう)しとど、参集者の目には入るまい」と言っています。

午後7時から句会が始まりま

トピック

◆是山の俳句添削指導

『東火』昭和21年7月号の「選の後に」(後藤是山述)の中から、是山の俳句添削指導を5句ほど紹介します。終戦直後という時代背景を踏まえ、是山の繊細な感性と適切な指導力が伺えます。

原句 マフラ渡す母の手ふる春浅し
添削 春浅しマフラを渡す別れかな

思うに作者の令息が特攻隊の飛行士として出発される首途(かど)の句であろう。従ってマフラを渡す母の手のふるえを採り上げて、母性の感じを出すのもさる事ながら、そういう手のふるえの、客観的な写生よりも、写生を超えた主観で包んだ表現の「別れかな」でも右の感じは深くなる。殊に季節が「春浅し」であるから、心の重さまでも現れようし、「かな」の詠嘆で、肉親の悲痛の気持ちも想像される。

原句 夜業開け疲れし肌に沈丁花
添削 沈丁花夜業に明し疲れかな

夜業に明けた人の疲れた感覚をうつ沈丁花の匂いは、如何にも戦時中の工場に働く人の実感として優れた感興である。「疲れし肌」に労働者の疲れた肌のたるみは感ぜらるるが、このままの表現では肌のたるみは現れず、句全体を嫌味

に導く。で、あっさり「疲れかな」と言い切つて「かな」の詠嘆で結べば、かえつてその点で感得せられる。

原句 経蔵の扉の赤し雪の舞ふ
添削 経蔵の扉のさびや雪舞へる

「扉のさび」とある以上、「赤し」と言わずともよい。また「扉」を戸と読ませているが、トビラと言った方がよく、経蔵(きやうぞう)の感じもしつくりする。

原句 早春の雲かげりきし遠嶺かな
添削 早春の遠山かげり来りけり
「かげり来し」という以上「雲」とはいわなくても想像される。「遠嶺」は「トホネ」と読ませるのだから、近ごろよく使われるけれどもあまり好ましい言葉ではない。努めて使用するほどの詩語でもない。

原句 ころびゆくひよこの背の小春かな
添削 ころびゆくひよこの群や春日影
季節「小春」は時候を指すので、

「ひよこの背の小春」は無理である。石小春、縁小春などしばしば使う人があるが、勿論これらも同様に無理がある。なお前後の投句からして早春と誤って使われているらしい。「小春」は晩秋初冬の候、春のような暖かい日のさす頃をいう。

す。床の間には緒方南溟（おがたなんめい）の書幅、壁面には智月尼（ちげつに）の自画賛の小幅、柱掛けには与謝野晶子の短冊が掛けられていました。参加者は人吉からも駆け付け20名あまり、床の間と次の間の二間続きで行われています。

投句は参加者の句と当日参加できず事前に寄せていた句友の句と合わせて、250句あまり。熱気と楽しさで1時間、選句が行われ、是山選の句も24句選ばれました。

このほかには山の祝賀句会は、日南祝賀句会、九電祝賀句会、山鹿公民館祝賀句会でも開催されたことが『東火』のこの号に掲載されています。

9『東火』昭和41年1月号、

草枕「峠の茶屋」跡記念碑建立

昭和41年（1966年）は夏目漱石生誕100年の年でした。是山はそれを記念して、東火句友、地元の河内芳野村野出（当時。現在の熊本市西区河内町野出）の有志などの協力を得て、草枕「峠の茶屋跡」記念碑建立を呼びかけました。

この記念碑建立の発端は、昭和

3年（1928年）に夏目鏡子夫人と娘婿・松岡譲氏が来熊した折、「草枕」の舞台となった天水町小天の前田家別邸（小説では志保田家として登場）などを是山が案内した時に話題になったものだったと言います。

それから40年近くが経ち、是山は「草枕」に出てくる峠の茶屋跡を、「二ノ岳の上り口で、河内芳野村野出、そこから小天（草枕）の那古井温泉までは、峠の茶屋の婆さんが言った通り28丁で、今ではバスが通っている」と、そこが野出峠であったことを特定しました。

是山が漱石とのかかわりを大事にするのには理由があります。それは『東火』の昭和41年1月号に掲載された記念碑建立趣意書に書かれています。

「漱石先生の第五高等学校教授時代、熊本に明治の新俳句が生まれ、紫溟吟社が結ばれ、その後隆替はあつたが、命脈は絶えずして昭和2年に『東火』の前身『かはがらし』が発行され、今日に及んだのである」として、「俳句上の系流的ものは緊密のつながりがある」と述べています。

記念碑の除幕式は当初桜のちら

ちら散る時期の昭和41年4月に予定されていましたが、祝賀会場に予定していた野出公民館の新築工事が遅れ、5月5日に催されました。除幕式には『東火』の句友や野出地区の人たちをはじめ、芳野村村長、芳野小の児童ら200名程が集まり盛大に開催されました。

またこれとは別の催しですが、同年1月12日、同じ漱石生誕100年を記念して、熊本県立図書館ホールで文藝春秋新社主催の記



昭和41年5月5日の草枕「峠の茶屋跡」記念碑除幕式で、『東火』句友らとともに撮った記念写真。

念文芸講演会も開催されています。東京から漱石の次男・夏目伸六氏が講演者として来熊しており、是山が「熊本と漱石」と題して講演し、荒木精之が「漱石の文学」と題して講演しました。このほか、鶴屋デパートでも「夏目漱石生誕百年記念展」が開催されています。

10『東火』昭和54年11月号より

熊本市名誉市民となる

昭和29年（1954年）に熊本市名誉市民条例が制定され、以来、徳富蘇峰、高橋守雄、細川護立、福田令寿、宇野哲人、堅山南風らが名誉市民となりますが、是山も中村汀女とともに昭和54年（1979年）に名誉市民となります。93歳の時でした。二人には10月1日に開催された熊本市制90周年記念式典の席上、表彰状と金杯が贈られました。

是山の顕彰理由は、中央の文化人などとの交流の中で地方新聞における文芸面の拡充、郷土史の研究、また歌人・俳人として長年にわたり後進の指導や育成にあたるなど、熊本の地域文化全般にわたる振興・発展に寄与した功績でした。

昭和54年11月号の『東火』を見ると、東火社が主催し同年10月14日に開催された「名誉市民後藤是山先生祝賀会」の様子が詳しく書かれています。

この席上、星子敏雄市長の急ぎよの上京のため代わって出席した藤本助役が祝辞を述べたことが書かれており、その祝辞の中で、星子市長が是山を名誉市民に推すにあたって、「(是山は)名利を求めず、時世に阿(おもね)らず、自己の真実を貫きとおした方だ」と述べていたことが紹介されています。

そして是山はこの祝賀会の謝辞で「(熊本市名誉市民は)元来野人である私にそぐわないのみか実は

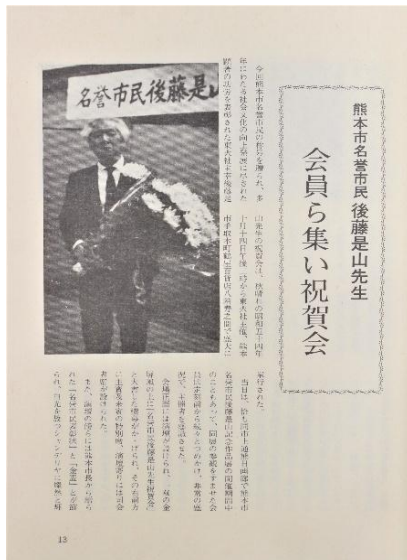
ひそかに重量感さえ覚えるのであります。(中略)このうえは名誉の冠を戴かない前も、戴いた後も別に変わることはない不断着のままの日常生活をつづけ(中略)御表彰の御主旨を空しくしないようにと存じて居る次第でございます」と述べました。

『東火』の同じ号の後記には改めて是山の気持ちを書かれており、「命長くして恥多し」と思うけれどもと前置きした上で、『ふだん着の雀めでたき三日かな』の句を紹介し、「正月三日の雀同様、(中略)相変わらず一老市民、一老書生として、熊本市内の一隅で生存してゆきたい」と述べています。

そして是山は、その7年後の昭和61年6月4日、あと4日で100歳となろうとする日に亡くなりました。

この時、歌人・安永路子(平成21年に熊本市名誉市民となる。)は是山の死を悼んで、『一片の詠詞(しのびごと)書く川ほとり水は現実を流れてやまず』

という歌を詠み、是山を偲んでいます。



『東火』昭和54年11月号には、是山の熊本市名誉市民表彰の祝賀会の様子が3ページにわたって詳しく掲載されている。

記念館ニュース

与謝野寛、晶子夫妻と是山が楽しんだ絵付けを体験！

令和8年(2026年)6月21日、後藤是山記念館においてお皿に絵付けする体験講座を開催しました。

与謝野寛、晶子夫妻は昭和7年8月、末娘の藤子を伴い九州を訪れました。その際、是山が久住をはじめ、阿蘇、人吉、天草など案内しました。

天草では高濱の景勝地を訪れ、その後、本渡の「水の平焼」の窯元に立ち寄り絵付けを楽しみました。

今回で2回目となるこの絵付け体験講座は、小学生から高齢者の方まで参加され、お皿に思い思いの絵を描いていただきました。絵付けしたお皿が焼きあがり、窯元から自宅へ送られてくるのを皆さん、楽しみていらっしゃいました。

講師も前回に引き続き、水の平焼『器峰窯』窯元の岡部俊郎さんをお願いしました。



第8号

熊本市後藤是山記念館だより
『淡 成 居』

発行日

令和8年(2026年)9月1日

編集・発行・文責

熊本市後藤是山記念館長 植木英貴
(熊本市文化財課所管)

〒862-0950

熊本市中央区水前寺2丁目6-10

電話・ファックス

096-382-4061

開館時間

午前9時30分～午後4時30分

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始(12/29～1/3)

入館料 大人 200円

小人 100円

